HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子どもの虐待と認知に関する研究 : 発達障害的な特徴に着目して［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	小泉, 径子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第11503号
Issue Date	2014-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56680
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	MICHIKO_Koizumi_review.pdf, 審査の要旨



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称　博士（教育学）　氏名　小泉径子

審査担当者	主査	教授	間宮　正幸	（北海道大学大学院教育学研究院）
	副査	特任教授	室橋　春光	（北海道大学大学院教育学研究院）
	副査	名誉教授	田中　康雄	（北海道大学大学院教育学研究院）
	副査	教授	友田　明美	（福井大学子どものこころの発達研究センター）

学位論文名

子どもの虐待と認知に関する研究
――発達障害的な特徴に着目して――

本論文は、厳しい養育現実の中にある虐待を受けた子どもによく見られる認知的な特徴を、３つの調査・実験を通して実証的に研究したものである。発達障害様の特徴に着目して比較検討が行われている。

これまで、わが国においては、虐待を受けた子どもに関する研究は様々な制限の下にあるため、その特性について共有可能な実証的データを得ることは甚だ困難とされてきた。入手可能な研究資料は、児童福祉関係諸施設や医療機関における行動観察や諸検査結果等に限られており、条件を整えて調査的・実験的研究を行い新たな知見を得ることは非常にむずかしい環境にある。一方で支援の実際に資する研究の必要に迫られている。

本論文は、そのような研究環境の中で、虐待を受けた子どもを対象に一定の定量化を試みる研究を行い、認知という側面から虐待を受けた子どもの特性に迫り議論を重ねている。

第１章では、虐待を受けた子どもの他者の表情理解の困難さについて調査している。「目からこころを読むテスト（RMET）」を用いて、複雑な表情をどのように理解するのかを検討することで、彼らの表情理解の特性を明らかにしている。一般家庭の子どもと比べて、他者のポジティブな表情の読み取りに困難が見られることが示された。すなわち、虐待を受けた子どもは、他者の笑顔などの表情をポジティブなものだと理解することに困難があることが示された。このような特徴は、親からポジティブな表情を向けられることが少ないために表情についての学習が十分に行われていないことによるということなどいくつかの可能性が指摘され考察されている。

第２章では、自閉症スペクトラム障害（ASD）のある子どもと類似した対人コミュニケーションの困難を示す虐待を受けた子どもの認知的な特性を、自閉症傾向尺度（AQ-C）によって測定している。両者は「コミュニケーション」、「社会的スキル」、「注意の

切り替え」の３つの項目で同様の傾向を示しており、「細部への注意」の項目では一般家庭の子どもと同じ傾向を示した。「想像力」の項目については一般家庭の子どもとASD のある子どもの中間の得点であった。すなわち、虐待を受けた子どもは独特の傾向を示すことを明らかにした。

第３章は、虐待を受けた子どもの衝動性や時間感覚に注目して時間割引率という指標を用いて測定した結果を考察したものである。虐待を受けた子どもは一般家庭の子どもよりも高い割引率（遅延した報酬に対する価値の割引が大きい）を示し、マグニチュード効果（受け取る報酬額が大きくなるにつれて割引率が減少する傾向）が見られないという結果を示した。虐待を受けた子どもは衝動性が高く、また、将来の不確実性を強く感じており、時間感覚の獲得に遅れがあることが示唆された。

総合考察では、なぜこのような認知的特徴が生じたのかを論じ、「社会的な学習の不足」と「虐待家庭という環境への適応」という観点から考察している。

本論文の意義は、従来のような経験的な知識ではなく、客観的な指標を用いて虐待を受けた子どもたちによく見られる特徴を定量化して提示したことにある。わが国の研究としては前例がなく評価に値する。また、近似と指摘されてきた発達障害の子どもの場合と比較して検討することから虐待を受けた子どもによく見られる状態像をあきらかにしたことも評価できる。さらに、本研究で用いられた RMET、自閉症傾向尺度、時間割引率を用いた方法などが虐待を受けた子どもの発達的変化を見る際の指標となる可能性を示した。これは、被虐待児支援の実際において新たな知見を提示する可能性があり評価できる。

本論文は、いくつかの点で評価できるものであるが、わが国での制度的な諸制限により、虐待の種別、時期、期間、保護されてからの時期に関する情報、また、子どものアセスメント情報も得ることができないまま検討を行っている。今後、その課題の克服を必要とする。

以上のように、本論文は、わが国の虐待を受けた子どもの認知特性を明らかにして児童福祉、教育、自立支援などの諸領域における被虐待児支援の方法に関する新知見を提示しており、教育臨床心理学の分野に求められている子どもの虐待防止研究に貢献したと評価することができる。

よって著者は北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。